

宮崎真奈[†] 折田奈甫[‡] 高橋大厚^{†‡}
[†]国際基督教大学 [‡]早稲田大学 ^{†‡}東北大学

要旨 日本語の一人称空目的語は、その文脈中に先行詞がある場合のみ生起できると提案されている(高橋 2020)。本研究は、コーパスを用いてこの仮説を定量的に検証する。空項の人称と先行詞の位置についてアノテーションを行った結果、一人称空目的語は他の人称や主語位置の空項と比較して顕著に頻度が低く、その先行詞の分布にも制限があることがわかった。研究者の内省によらない自然な言語データにおいても一人称空目的語は生起に制限があることが確認された。

1. はじめに

日本語は、指示対象が文脈から明らかな場合、主語や目的語を明示的に示す必要がない言語である。しかし、例文(1)¹のように、一人称空項は主語にはなれても目的語として用いることができない(長谷川 2007, 高橋 2020)。

(1) [それぞれの発言者が自分自身について述べる状況で]

話者 A: [e]魔法を使えます。

話者 B: 校長先生がいつも*[e]ほめています。

(高橋 2020)

長谷川 (2007)は、三人称空項は三人称トピックがトピック主要部とのトピック素性の一致により、その指定部に移動し、省略をうけることにより生じる一方、一人称空項は一人称トピックが話者に関わる機能範疇であるモダリティ主要部との人称素性の一致により、その指定部に移動し省略をうけることにより生じると論じている。これら関与する素性の違いにより、三人称トピックと一人称トピックが目的語位置に生じた場合の、そしてそれらがトピック主要部もしくはモダリティ主要部の指定部に移動し省略を受けた場合(すなわち、三人称空目的語と一人称空目的語が生じた場合)の文法性の違いを説明する。三人称トピックが目的語位置からトピック主要部の指定部に移動する場合(そして移動後に省略される場合)、主語にトピック素性がない限り、その移動は最小移動条件に違反しない。一方、一人称トピックが目的語位置からモダリティ主要部の指定部に移動する場合(そして移動後に省略される場合)、主語名詞句には常に人称素性が存在するため、その移動は最小移動条件に違反し排除される(よって、一人称空項は目的語位置に生じることができない)。

この長谷川 (2007)の分析とその基になる観察に対して高橋 (2020)は、(2)のような反例を指摘し、先行文脈に同一の先行詞がある場合は一人称空目的語が可能であると述べている。

(2) ハリーは私を溺愛したが、ジェームズは厳しく[e]育てた

(高橋 2020)

¹ 本稿では例文中の空項を[e]で表す。

このような長谷川 (2007)の分析の反例と思われる事例に対して、高橋 (2020)は項省略を用い説明を試みている。(2)の後続節において、目的語位置には一人称対格句「私を」が生じ、先行節の名詞句「私を」との同一性のもとで省略をうけている、と考えるのである。この場合、省略をうける一人称名詞句はトピックではなく、対格目的語なので、長谷川 (2007)の言うモダリティ主要部との一致とそれに付随する移動を受けず、最小移動条件の違反も生じないことになる。

以上から、日本語で一人称空目的語が生じるためには、文脈中に先行詞が必要であると予測される。また、このような生起制限があるため、他の人称や主語位置の空項と比較してその頻度は顕著に低いと予測される。本研究は、コーパスを用いてこれらの予測を定量的に検証する。

2. データ

現代日本語書き言葉均衡コーパス (Maekawa et. al 2014)の一部に述語項構造などのアノテーションが付与された BCCWJ-DepParaPAS (浅原他 2016)を用いた。このコーパスのうち、空項の出現頻度が比較的高そうなエッセイ・説明文・物語の3種類に文書のジャンルを限定した。この中からガ・ヲ・ニ格のタグが付与されている空項をランダムに抽出し、そのうち 2681 の空項に対して先行詞と人称の情報を以下の通り人手で付与した。このアノテーション作業は全て第一著者が行い、第二・第三著者が一部確認をした。

先行詞の位置は、前文、空項と同じ文、後文、それ以外（前文・後文より離れた位置にあるか先行詞がない場合）の四通りに分けてタグ付けを行った。先行詞がもともと存在しない場合と、前後一文より遠い場所に存在すると考えられる場合は区別せずに「それ以外」として扱った。先行詞の人称については、前後の文脈から判断して一人称・二人称・三人称のいずれかのタグを付与した。疑問詞や文全体が先行詞の事例は三人称として扱った。例えば、以下(3)の空項に対しては、文脈から先行詞は直前の文の「人間」と判断し、先行詞の位置は前文、先行詞の人称は三人称としてタグ付けした。また、空項にはヲ格が付与されていることから、この空項は三人称直接目的語の空項であると判断した。

(3) 「…人間は、みにくいのだ」と、サウードは、つぶやきました。「[e_ヲ] しんじていても、きつとうらぎる。やさしいふりをしていても、心ははら黒い。」 (00007_A_PB2n_00003)

3. 結果

本研究のアノテーションにより得られた空項の人称と文法機能の分布を表1に示す。一人称空目的語は他の人称の空目的語よりも有意に頻度が低く (1人称と2人称を比較 $\chi^2(1, N=673)=5.94$, $p=0.01$; 1人称と3人称を比較 $\chi^2(1, N=2574)=82.23$, $p<0.0001$)、そのほとんどが間接目的語であることがわかった。他の人称や主語位置の空項と比較してその頻度は顕著に低いという理論の予測を支持する結果となった。

表 1 空項の人称と文法機能の分布

		一人称	二人称	三人称	合計
空主語 (人称ごとの空主語の割合)		525 (93%)	91 (85%)	1532 (76%)	2148
空目的語	直接目的語	3	9	275	287
	間接目的語	38	7	201	246
合計		566	107	2008	2681

次に、一人称空項の先行詞の位置の分布を表 2 に示す。一人称空目的語のうち、直接目的語の先行詞 3 例全てが文脈中（前文と同文）に観察された。一方、間接目的語のうち 3 割強（「その他」13 例）は、空項付近の文脈中に明示的な先行詞が存在しなかった。

表 2 一人称空項の先行詞の位置の分布

	先行詞の位置				合計
	前文	同文	後文	その他	
主語	71	152	37	265	525
直接目的語	2	1	0	0	3
間接目的語	9	12	4	13	38

先行詞の位置については、例えば次のように判断しアノテーションをしている。例(4)のヲ格が付与された空直接目的語の先行詞は直前の文「わたしをしんじてください」の目的語「わたし」であるため、先行詞の位置は前文としてタグ付けをした。

(4) わたしをしんじてください。－ [e_ヲ] しんじてくださらなければ、魔法の宝石はあなたがたの手にはありませんよ」大臣は息子と目をあわせました。(00007_A_PB2n_00003)

例(4)は一人称目的語の主題化（ひいてはその省略）を可能にする授受表現による認可（長谷川 2007）、もしくは項省略の 2 通りの分析が可能である。なお、(5)のように授受表現を取り除いても一人称空目的語の解釈が可能なので、後者の分析が適用できる。

(5) わたしをしんじてください。－ [e_ヲ] しんじなければ、魔法の宝石はあなたがたの手にはありませんよ」大臣は息子と目をあわせました。

また、以下の例文(6)と(7)のようなヲ格が付与された一人称空項も空直接目的語として扱っている。これらの事例は、先行文脈に「私」という明示的な先行詞が存在するため、高橋（2020）の項省略分析で説明が可能な一方、次の通り他の分析も考えられる。まず、(6)では空項を含む述部「頼りにしてくれている」に、一人称目的語の主題化を可能にする授受表現「くれる」が付随しており、この授受表現により省略が可能になったとも考えられる（長谷川 2007）。次に、(7)の空項を含む述部「頼りにさ

れる」には、本動詞の項の文法機能などの役割を変える受け身表現「される」が付随している。よって、この空項は主語であり、一人称空目的語として扱うのは適切ではないとも考えられる。

(6) 大抵の人はお客さんや取引先に頭を下げて働いているのに、お金を貰いつつ感謝されるのだからこんなに良い仕事はない。それにホームヘルパーなんかを頼む人は一人暮らしの人が多から、彼等は決められた日時に私が行くのを心待ちにしてくれていて、[e_→]頼りにしてくれている。そして又、人から頼りにされるとするのも気持ちの良いもので、そこに自分の存在価値を見い出したりする。
(00009_A_PB42_00003)

(7) それにホームヘルパーなんかを頼む人は一人暮らしの人が多から、彼等は決められた日時に私が行くのを心待ちにしてくれていて、頼りにしてくれている。そして又、人から[e_→]頼りにされるとするのも気持ちの良いもので、そこに自分の存在価値を見い出したりする。自分は役に立っているんだ、自分の仕事は人を喜ばせているんだ、という満足感は何物にも代えがたい。
(00009_A_PB42_00003)

一人称空項が間接目的語であると判断した事例では、表2の「その他」のとおり、空項付近の文脈中に先行詞が観察されない例が13例あった。これは一見高橋(2020)の仮説に反するよう見える。これら13例について、前文・後文よりさらに離れた文脈も確認したところ、やはり先行詞が観察されなかった事例が3例あった。これら3例は、(8)のように直説話法を用いた台詞の中に空項があった。例(8)のように指示対象(「志津」)が文脈中に存在しても、直接話法の台詞の中では一人称の「私」が先行詞だと考えられるため、この事例は先行詞がない一人称空目的語であると判断した。

(8) 志津は三宝と自分とふたりだけのスナップも要求したし、正樹と嘉子のふたりを三宝に撮らせてくれた。「写真、必ず[e₌]送ってね」正樹がフィルムを巻き上げたところで、志津は力を込めて言った。(00006_A_PB29_00003)

しかし、空項をとる動詞に授受・受け身表現が付くことによる一人称トピックの省略分析(長谷川2007)が適用できる可能性も考えられる。これら直接話法中にある空項3例について、授受・受け身表現の有無も確認した。その結果、これら3例のうち、2例に授受・受け身表現が観察された。授受・受け身表現のどちらもない例が上述した(8)で、授受表現がある例を以下(9)に示す。例(8)は、一見して授受・受け身表現がないように見えるが、空項がある文の述部「送ってね」には授受表現「ください」が省略されているとも考えられる。よって、空間接目的語で文脈に先行詞がなく授受・受け身表現も全くないと考えられる例は今回の調査では観察されなかった。

(9) そのうちに、きっこう言うでしょう。「今度いつイエス様の話、[e₌]してくれるの?」「キュー」(00015_A_PB11_00006)

4. まとめ

本研究は、日本語の一人称空目的語は文脈中に明示的な先行詞が必要であり、このような生起制限のために他の人称や主語位置の空項と比較してその頻度が顕著に低くなるという長谷川 (2007)・高橋 (2020)をもとにした理論的予測を、コーパスを用いて定量的に検証した。空項の人称と先行詞の位置についてアノテーションを行った結果、一人称空目的語は他の人称や主語位置の空項と比較して顕著に頻度が低く、その先行詞の分布にも制限があることがわかった。一人称空直接目的語の先行詞は、空項と同一の文か直前の文に存在した。一人称空間接目的語については、先行詞が存在しない事例が観察されたが、これらは受け身表現により文法機能が変わった事例、授受表現によってモダリティ要素が付加された事例が大半を占めていた。よって空間接目的語についても理論の予測の範囲内だと考える。

本研究は、既存のコーパスの一部に人称や先行詞の位置などのアノテーションを行うことで、これまで内省によってのみ検証されてきた日本語の一人称空目的語の分布に関する理論的仮説を裏付ける新たな証拠を提示した。今回の調査では、文書のジャンルをエッセイ・説明文・物語に限定したが、話し言葉やブログなどの比較的話し言葉に近い文書では理論的予測の範囲を越えた性質の異なる一人称空目的語が観察されるかもしれない。異なる形式やジャンルのデータも調査し、理論の妥当性をさらに検証する必要がある。

参考文献

- K. Maekawa, M. Yamazaki, T. Ogiso, T. Maruyama, H. Ogura, W. Kashino, H. Koiso, M. Yamaguchi, M. Tanaka, and Y. Den (2014). "Balanced corpus of contemporary written Japanese," *Language resources and evaluation*, 48(2), 345–371.
- 浅原正幸 & 大村舞 (2016). BCCWJ-DepParaPAS: 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 係り受け・並列構造と述語項構造・共参照アノテーションの重ね合わせと可視化. 言語処理学会第 22 回年次大会発表論文集, 489-492.
- 高橋大厚 (2020). 「一人称空目的語と項省略」『日本語研究から生成文法理論へ』 斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・高橋真彦・村杉恵子 (編). 開拓社. 172-183.
- 長谷川信子 (2007). 「1 人称の省略：モダリティとクレル」『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』 長谷川信子 (編). ひつじ書房, 331-369.